

1945年8月 灰燼の広島 一人の物理学者

百年 未来への歴史 核の呪縛

「核兵器と人類は共存できない」と訴え続けてきた日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が10日、ノーベル平和賞を受賞する。20世紀初め、アルバート・アインシュタインが導いた等式「 $E=mc^2$ 」が原動力となった兵器は、今も世界の命運を握ったままだ。核廃絶か、人類の滅亡か――。「核の呪縛」ととらわれた世紀を考える。

1939年、カリフォルニア大学に在籍していた米国の理論物理学者、ロバート・オッペンハイマーに向かって、同僚の物理学者ルイス・アルバレスが、声を張り上げた。「ドイツがウランを核分裂させた！」アルバレスが示した新聞は、ドイツのオットー・ハーンらが38年12月、ウランの原子核に中性子を照射すると、核分裂が起きたと証明したと伝えていた。「不可能だ」と疑うオッペンハイマー。だが、アルバレスが再現実験に成功すると、こう言う。「世界中の物理学者が同じ意見だ」「爆弾だよ、アルバレス、爆弾だ」

映画「オッペンハイマー」が描いた一場面だ。ハーンは44年、ノーベル化学賞を受賞。翌年、オッペンハイマーらは原爆開発に取り組み「マンハッタン計画」を成功させ、2発の原爆を投下する。日本の降伏をもって、第2次世界大戦は終結し



仁科芳雄

た。存在そのものが、戦争の帰趨を決する兵器の産声を世界中が聞いた。45年8月6日、米軍観測機に搭乗し、広島上空のキノコ雲を見たのは誰か。オッペンハイマーは「まさに生き地獄だった」との言葉を残した。その心中は、いかに悲しかったか。米軍から遅れること4年、ソ連が核実験に成功する。冷戦の中、両国が核のボタンを持ちながら、核のボタンを押し合っている。仁科はその後、肝臓がんで亡くなった。60歳だった。敬称略

「まさに生き地獄だった」

2面に続く